

周賀郷在郡西南

昔者氣長足姬尊功神欲征伐新羅行幸之時御船繫此郷東北之海、艦舳之戕戕化而爲磯高二十餘丈、周十餘丈相去十餘町、突出嵯峨草木不生、加以陪從之船遭風漂波、於茲有土蜘蛛名鬱比袁麻呂救濟其船、因名曰救郷、今謂周賀郷訛之也。

〔釋日本紀述十義〕火國造

公望私記曰、案肥後國風土記云、肥後國者本與肥前國合爲一國、昔崇神天皇之世、益城郡朝來名峯有土蜘蛛名曰打猿頸猿、二人率徒衆百八十餘人、蔭於峯頂、常逆皇命、不肯降服、天皇勅肥君等祖健緒組、遣誅彼賊衆、健緒組奉勅到來皆悉誅夷。

〔釋日本紀述八義〕穗日二上天浮橋

日向國風土記曰、臼杵郡內知鋪郷、天津彥父瓊瓊杵尊、天降於日向之高千穗二上峯時、天暗冥晝夜不別、人物失道失道原作、物也難別、於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗、二人奏言、皇孫尊以御手拔稻千穗爲粃、投散四方、必得開晴、于時如大鉗等所奏、搓千穗稻爲粃、投散即天開晴、日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號智鋪。

國栖

〔古事記中神武〕答曰、僕者國神名謂石押分之子中略此者吉野國巢之祖

〔古事記傳十八〕吉野國巢昔より久受と呼來れども、此記の例、若久受ならむには、國字は書くまじきを、此武神にも輕島宮神應段にも、又他の古書にも、皆國字を作るを思ふに、上代には久爾須須といひけむをや、後に音便にて久受とはなれるなるべし略註、されど正しく久爾須といへること物に見えねば、姑舊のまゝに、今も久受と訓り、さて今も吉野川に添て、南國栖村栖といふありて、其あたり七村を總て國栖莊といふなり、万葉十六に、國栖等之春榮將探司馬乃野